

海月(くらげ)

令和元年8月第3週放送

「沈みゆく ^{くらげ}海月みづいろと なりて消ゆ」

^{やまぐちせいそん}俳人山口青邨の句です。海月が、海の底の方へ沈んでいく。半透明の身体は、沈むにつれて、海の色に全身を染めていき「みづいろ」になって消えていく、という情景でしょう。

海月の半透明の身体は、海月を取り巻く海と半ば一体になっています。言い換えれば、自らを取り巻く海を、半透明の身体に映しています、まるで鏡のように・・

^{だいえんきょうち}大圓鏡智という仏教の言葉があります。大いなる丸い鏡のような智慧のことです。

鏡のような智慧とはどのようなものでしょうか。

それは、自己中心的な思いがなくなり、世界を鏡のように映している智慧ということでしょう。世界を鏡のように映している、ということは、世界と自分が全く別のものでなく、つながっている、ということになります。

山口青邨の句にあるように、海と一つにつながりながら、海の底に消えていく海月のさまは、^{だいえんきょうち}大圓鏡智の智慧を思い起こさせます。

さて、海月には毒があります。

この毒は、自己防衛のため、そして獲物をとらえるために用いられます。自分を守るため、自らの生命をたもつために使う毒は、私たちの心にある、自己中心的な思いの根深さを連想させます。

私たちは、さまざまなつながりの中に生きています。そのことに真に気づいた時に、世界を鏡のように映す智慧があらわれることは、先ほど述べたところです。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

しかし、自己中心的な思いは、そう簡単には、なくなるものではありません。まず、そのことをしっかりと見つめ考え、気づいていくことが、大圓鏡智^{だいえんきょうち}の智慧の現れにつながっていくのだと思います。

半透明の身体に海の色を映し出す海月。海と一つながりになっていると同時に、自分を守り、生命をたもっていくための毒をもつ海月。

さまざまつながりの中に生きているのに、それを忘れてしまい、自分中心の思いにとらわれてしまいがちな私たちに、つながりの大切さを教えてくれている様な気がいたします。

— 終 —